

## ウィーン新旧音楽抗争 一八八七年（二）

——いま一つの対比列伝の試み——

須 永 恆 雄

### 七

一八八七年七月に入って早々ブルックナーはオランダから顕彰される。前年十一月にアムステルダムでの第七の大成功がそのきっかけとなったが、オランダ最古にして最大の音楽振興協会からその通信会員となることを招待されたのである。

四日には音楽院生徒であったヘレーネ嬢の訃報への礼状を同じウィーン在のマリー・シュヴァルトツベク・エードレ・フォン・ヴァーラウに宛て認めている、「何よりも先ず貴女ならびに未だ存じ上げませんが御両親様に心からのお悔やみを申し上げる次第です。お知らせいただきましたこと、心底から御礼申し上げますが、当方落手致しましたのは六月十三日夕刻五時のことでした。即ち、御葬儀の二時間「後」のことです！

小生、このたびの悲しい出来事に恐ろしく震撼されました！

高貴なるヘレーネ嬢に永久の憩いを神が与え賜わんことを!

未だ謎を解くことが出来ずにおりましたのは——あからさまに申せば、小生解せずにおりましたのは、マリー嬢様がお約束をお守りにならなかったことです!

今となってその全てが恐ろしいほど明らかにりました!

(楽友協会でも亦、小生は何も知り得ませんでした。)

第八交響曲はちょうど完成したところです。第七は英国と米国で大好評を博しました。

貴女の高貴なるお邸を遅かれ早かれ一度お尋ね致したく存じております。お許しいただけますならば! お届け致します者は小生の家政婦カティーさんです。残念ながら未だ拝顔の榮に浴する事なき御母堂さま並びに小生の親愛の上なき友、即ち貴方様の御手に心から接吻申し上げます。お父上に深甚なる敬意を払いつつ、

敬白、

貴方様に恭順なるアントン・ブルックナー」

二三日にはフランクフルト・アム・マインのマンスコプフなる好事家に、おそらく要請に依えてのことらしいが、以下のとおり認めている、「小生の第七は、また十月か十一月以降はそれに第四も加わりますが、また同じく小生の五重奏曲も、ウィーン歌劇場のグートマンの許にあります。／第三とテ・デウムはウィーン、ベラリアの許です。／それ以外の交響曲は未だ刊行されておりません」。

同日ブルックナーは宮廷礼拝堂に夏期休暇の願いを提出、ピウス・リヒターから承認を得る。

\* \* \*

一八八七年七月七日にブラームスはクララ・シューマンに認める、「……ようやく御礼を伝える時間が出来ました！ つねならず快適な気分を過日ライン河畔では堪能できました。この旅はこの上なく報われました。……ヴェルナーは申し分なくその役目を務め、万事上首尾、まさにこの類の祝祭には常日頃無いような出来でした。私の仲間たち、男女いずれも可愛らしく陽気でしたし、しまいはリューデスハイムで極上のワインを好きだけ試飲出来ました。最上の灰色の空にケルンでは、また今、当地（トウーン）では再び見事な青空に恵まれました。それを有効利用しない私ではないこと、お察しいただけるとおりです。かくなる次第で昨日は、夏期には此処の湖畔に居を構えて陣取っている友人ヴィー・ドマンを訪ねるべく四時間歩きました。今日は早朝五時半に起床して、一時間半歩き、蒸気船に乗って帰宅しました。これなら貴女もまさに気楽にお試しになれると思っただけですが、いかが。／ともあれなお千回も御礼申し上げます。フランクフルト滞在は素敵でした——秋には再訪を期しております！——ところでベルヒテスガーデンにお出でになるのは何時になるかお伝え下さいますようお願い致します！心より御挨拶申し上げます、君のヨハンネス」。フランチ・ヴェルナーとの約束を守って第二四回「総合ドイツ楽友協会」音楽家会議に出席すべくケルンに立出るのでブラームスは初め渋っていた。勝利の歌等、彼の合唱曲、またヴァイオリン協奏曲も演奏され、ブラームス自身もハ短調トリオの演奏に加わって花を添えたが、ブラームス発見者を自認していたR・ポールの評は渋かったという。

A. B. Briefe. 2. Bd. S. 15f.

C. Schumann. 3. Bd. S. 491f.

Herzogenberg. 2. Bd. S. 159.

八

一八八七年八月二一日にブルックナーはザンクト・フローリアンから認める、「敬愛する貴女におかれましては、小生の昨年の失策に何卒ご寛恕いただけますようお願い致します！」

御寵愛に対する小生の恭順この上なき感謝を何卒お受け下さいますようお願い申し上げます！／これ以降もなお引き続き小生の守護天使でありつづけて下さいませようお願申し上げます！

小生の人生の数多諸々の嵐のさなかにも信頼の念を失わず見上げることが許されるような守護天使であり続けて下さいますよう、かかる守護天使有ればこそ小生幸いにもハレルヤと歓呼することが叶う次第であります。

我が世評高き庇護者、宮廷楽長ハンス・リヒター博士、即ち貴女の御主人に、小生の深甚なる敬意をお伝え下さいますよう！／ナスヴァルトにいらっしやるとは！ 素晴らしい！ この上なく深き畏怖の念を以て奥様の御手に接吻を捧げつつ、貴女の御寵愛を希う、

感謝の義務を負う僕たる

アントン・ブルックナー」

書面からも明らかなお手紙の宛先は音楽家の作品の指揮者でもあったヴァーグナー党の第一人者ハンス・リヒター夫人で、彼女は七五年にリヒターがウィーン宮廷歌劇場の楽長兼楽友協会指揮者の任に就いた頃にその妻となった。前任地ブダペスト時代にリヒターが知り合ったとおぼしきマリーは、旧姓マリシユカ・フォン・シタニイと称する女優。長年連れ添って夫より一年だけ長生きした（一九一七年没）。

二五日にはベルリンのヘリッヒに宛てて認める、「貴殿からお便り賜りますのはまことに名譽なことで心から嬉しく感謝申し上げます！ 楽長レーヴィ殿がフォン・ビューロー氏のせいで小生に背を向けられることにはならなかった由、まことに嬉しく存じます。第八は完成し、第九は開始しました。／＼グラヴィーナ伯爵夫人に、小生未だ存じ上げないながらも、畏くも御手に接吻申し上げます！ レーヴィ氏からは御自身から小生宛お便りいただければ幸甚に存じます。

今後貴殿の御寵愛により小生を御鞭撻下さいますようお願い申し上げます、この上なく深き替嘆の念を込めて  
貴殿に

恭順この上なき

アントン・ブルックナー」

\* \* \*

二七日にビルロートは避暑先ザンクト・ギルゲンからブラームスに認める、「今月十二日の君の手紙にはとつくにお返事しなければならぬところだった。六月十五日から昨日までの間、自然の中に暮らして自分の中に閉じこもるや、ともすればたちまち人間を襲う、あの書くことの億劫さに屈することがなかったならということだが。我ながら樹か岩のように、たまたま一寸は動くことがあっても、自然の一部となってしまうような気がする。この間、僕はすっかり散歩に慣れて山々を登ったり下ったりしたから、シャーフェルクのとっぺんまで、またもつと高い丘陵に登ったってちつとも疲れなくなった。これまでの人生すべての中でも今ほど易々と、また今ほど楽々と歩けたことはない。これも練習の賜さ。…」また手紙の後半では友の新作にも触れて「ある種の人々にまつわるまったくの神話が出来上がってしまうのは妙なことだ、たとえば君についてだって、またぞろオペラ作曲家になったなぞと。ちつとも「ロマンティック」な

んてものじゃないところが残念だ。新しい二重協奏曲のことはもちろん楽しみにしているけどね。——ハンズリックと  
 奥方が二日間僕のところ滞在了した。今日はファーバーがイシュルから食事に来て来たよ。君はどうなんだい？  
 一度我がトウスクルムを訪れる気はないか、それだけの労に値するとは思うが。ウィーンへ戻る途中にでもいかがかな。  
 家内は家の用で九月十七日にはウィーンへ戻る、僕は二六日まで居座ってエルゼとともに家事を執る。君が来てくれ  
 ば皆大喜びだ、僕のところ泊まれるよ。前の日に電報でも呉れば助かる、君の御来訪時にシャープベルクの上に居  
 たりなんてことがないようにね。」

既に月半ばにも、クララに文中に触られた同曲の着想を報じていたが、もっとヴァイオリンを能くする人に譲るべ  
 き構想ながらヨアヒムがそれを諦めたので已むなく自ら筆を執って仕上げたとそこでブラームスは語っている。

Chronologie, 1. Bd. S. 536f.

A. B. Briefe, 2. Bd. S. 16f.

Bilroth, S. 419f.

Clara Schumann, 3. Bd. S. 493.



## 九

「ハレルヤ！ 第八完成、そしてこのことを第一にお知らせするのは、是非とも我が芸術の父でなければ。管弦楽パート譜はウィーンで写譜させますか、それとも、小生負担で、ミュンヘンで？ 宮廷楽長ハンス・リヒターがロンドンで第七を上演致し、彼が小生に伝えるところでは、喝采の嵐でこの作品は迎えられたとのこと。ニュー・ヨークとボストンでも同様。オランダの楽友協会は小生を通信会員に任命しました。小生はハンス・リヒターとともにナスヴァルトに居り、小生の旅立ちの時に彼は、ナスヴァルトの民族衣装を着てスケルツォの主題を長時間吹き鳴らしてくれたのです！ 先ずは第一に——貴殿に第八の上演をお願い致します、然る後に皇帝陛下に献呈のお許しをお願いしたいと存じます、その後初めて、小生にハンス・リヒターは約束したのですが（というのも小生のプランが気に入ったから）彼は軍隊のためにコンサートを開くでしょう、というのはつまり、皇帝が献呈を受け入れて下さることになれば、ですが、御負担をおかけ致し、何卒御嫌損なわれませぬよう！／小生は十五日にウィーン第一区へス小路七番地へ戻ります、小生の当地で二〇年目を迎えます職場へと。フォン・ヘリッヒ氏から過分の御厚意ある来信あり！ ビューローがまだ万事意のままにやり果せるわけではないとの手紙は小生に慰めを与えてくれました！ 深甚なる謝意ならびに最大の敬意を以て

貴殿にこのうえなく帰依したる

賛嘆擱く能わざる

アントン・ブルックナー」とブルックナーが一八八七年九月四日に認めたのに対してヘルマン・レーヴィは八日に返



信、「尊敬する友よ！」

御作の第八を私どもに委ねてくださるおつもりのこと、衷心より感謝申し上げます！ 何卒すぐにも総譜をお送り下さいませよう、パート譜は小生が当地で写譜させます！ しかし上演は十一月末か十二月初めにならないと叶いますまい！ リヒターと御昵懇の由、お慶び申し上げます、——プロローベに当地に御来光の節は小生宅にお泊まり下さい！是非とも！ 本當にゆっくり休暇をお取り下さいますよう!!」

\* \* \*

年来の友であった名ヴァイオリニストのヨアヒムとは、その離婚騒動にまつわる行き違いから往事の友情にいささか影が射していたが、その友情を回復すべく、ブラームスは元々五番目の交響曲として着想したものを換骨奪胎、かくして成立したのが二重協奏曲であったという。クララ・シューマンをも巻き込んでのその初演までの経緯のやりとりを多少遡って追えば、七月に「芸術にまつわる連絡」を取りたいとして通信の宛先の確認を求めるブラームスの書信にヨアヒムは間髪を入れず、「願わくは君の新作のことをお知らせ願いたい、諸近作（オペラ、と作品を謂うラテン風の表現をここでヨアヒムは用いている）を真正の感動を以て通読し演奏してみた後であればなおのこと。あのトリオより美しいものは君とてそうしばしば書くことはできない、と思う！」と返信。近作とは、作品九九から一〇一までの三曲、即ち第二チェロソナタと第二ヴァイオリンソナタと第三ピアノトリオであるが、当の二重協奏曲には次の作品番号一〇二が当てられることになる。少しでも気に入らなければいつでも引込める云々のブラームス恒例の申し出に、断るべくもないヨアヒムからは歓迎の返事。いざ譜面が届くとヨアヒムは「高々四、五カ所の取るに足らないヴァイオリン声部の訂正の必要」を認め、「快活で喜悅あふれる」曲に満足して「千の感謝」を表して作曲者を鼓舞する。ピアノ伴奏に

よるソロの練習をフランクフルトのミュリウス通、即ち「シューマン夫人」の許で、九月半ばにでもとの案、また「十月十八日に君と日を初回コンサートに招くことができる」とヴェルナーも大喜びだ」。初演の予定日も提案される。「シューマン夫人に九月十八日にフランクフルトでと提案したら、彼女はその頃バーデン・バーデンらしい、其処なら君にはなお好都合か」とヨアヒム。ところが一〇日になって、息子のためにミュンヘンを離れられないとのクララからの連絡が入り、それならミュンヘンではどうか、とのヨアヒムの再提案にブラームスは、むしろ少し遅らせてやはりバーデンで二一日にと再々提案、等々練習日程にはいささか紆余曲折を経る。

Chronologie, 1. Bd. S. 536f.  
 A. B. Briefe, 2. Bd. S. 18ff.  
 Joachim, 2. Bd. S. 214ff.



## 十

絶大な信頼を寄せられ、初演の担い手として作曲家の期待を一身に担ったレーヴィは、いざその譜面が、すなわち空前、絶後の成功を勝ち得た前作第七の後に満を持して完成した第八のその譜面が手元に届くと、期待に胸膨らませて繙いてみれば、これが何とも八幡の藪知らず、「何日も格闘してみたがどうしてもみ込めない」この難物にひどく「失望」、途方に暮れて作曲者の弟子のシャルクに救いを求める。「どうか即座にお返事下さい、ブルックナーにどう対したらいいでしょうか。私は驢馬呼ばわりされようが、あるいはもっと悪ければ忠誠心を欠いていると非難されようが構いません、それは安んじて甘受しましょう。しかし私が懼れるのもっと悪いことです、つまりこの失望が彼を完全に打ちのめしてしまうのではないかと。レーヴィのブルックナーに寄せる親愛の深さが読み取れるのみならず、これはブルックナーの人となりをも能く伺わせる文面ではないか。

逡巡の末、一八八七年の十月七日付でレーヴィはブルックナー本人に宛て認める、「親愛なる敬愛する友よ！

かれこれもう一週間この方、貴殿に長いお手紙を差し上げようと（思いながら）格闘して参りました。申し上げなければならぬことをどう然るべく言い表したもののか、これほどに苦慮したことは未だかつて御座いません！ しかしついにそれを申し上げなければならなくなりました：

という次第にて申し上げますが、第八をこのままの形で上演することは私には不可能です。どうしても理解が及ばないのであります！ 主題の数々はかくも見事にして壮大であればあるだけ、小生にはそれをどう演奏したものが氣遣われるのです、樂器法はまさに不可能なものと言わざるを得ません。曲に判断を下すなどということは畏れ多くも、と

でも出来かねることではありますが、小生の受けた印象の一端を申し述べるとすれば、また聴衆及び小生に及ぼすべき幾ばくかの効果を予め予想出来るのみであります、その観点から申すならば、この第八の上演を小生の主催する定期公演の舞台に載せるのは冒険であること、またかかる冒険は、貴殿の為を慮って、敢行するわけに参りませんことを、包み隠さず貴殿に申し上げないわけに行きません。第七の初回の練習にオーケストラが辛抱しきれなくなつて、その曲をレパートリーから外せとの声まで上がったことですが、そのときは曲のために小生が肩入れして、楽員たちにこう呼びかけたものです、五回練習すれば諸君も気に入ってくれるはずだ！と。第八の場合しかし小生にこれは出来ません。何時間も、いや何日間も小生は総譜の前に座り込みました。しかしどうしても曲に近づくことが出来ませんでした。小生にのみその責任はがあると、よるこんで認めましょう。ウィーンのご友人方はいっただう仰つて居るのでしょうか？ 突然に小生が貴殿の作品への理解を失ってしまったなどということがあるとは、とても信じられません。むしろ最近何年間にわたる世間とのたえざる葛藤と孤立のために、美と均衡と快音への貴殿のセンスがいささか曇つてきたのではないか、などともつい考えてしまいがちです。貴殿のトランペットやチューバ(そもそも金管全体)の扱いはそれ以外どう説明したらいいでしょうか！ これ以上細目にわたることはご容赦下さいまして——このような御期待に添えないことを貴殿に申し上げなければならぬとは小生痛恨の極みでありますこと、どうか信じて下さいませよう——御作上演の約束から小生をお解き下さいませよう、さぞや拙劣な上演とならざるを得ないことでしようから……」

この十月にはハインリヒ・シェンカーが音楽院のブルックナーの講義に聴講届けを出している。

\* \* \*

「バーデンで一緒にできたのは何と有意義でまた好ましいことだったか、また考えられる限りのあらゆることにどん

なに君に感謝しているか、君もよく分かってくれているといいが。多くの言葉を費やしてそれを申し述べはしなかったけれどね。また僕としては言葉で確保するより、来るべきケルンでのその日のことを思い描いてこの上なくご満悦でいるだけの方がよほど好ましいのだ」とヨアヒム宛にブラームスは認める。十月十八日は、ケルンでのヨアヒムとハウスマンのソロによる二重協奏曲初演の日であった。

Chronologie, 1. Bd. S. 540f.

A. B. Briefe, 2. Bd. S. 21f. S. 23.

Joachim, 2. Bd. S. 214ff.



十一

十一月二日の万霊節にはヴェーリンガー墓地にベートーヴェンとシューベルトの墓に詣でる習慣であったが、方ヤザンクト・フロリアンではドイブラーの指揮でレクイエムが、オッフエルトリウムとベネディクトゥスを省いて上演された。

三日にマンハイムの音楽院での弟子エーミール・パウアーに宛てて認める、「万事に深謝！ 素敵な宮廷管弦楽団にも心からの私の感謝をくれぐれもよろしくお伝え下さい！ 私はそれがたいへん嬉しかったから、宮廷楽長殿には将来もまた私の作品をお心にかけていただければ幸いです。

まもなく今度は第四交響曲がグートマンの出版社から出ます。二短調の第三もじきに改訂版がレットイヒから刊行されます。こちらからは〈テ・デウム〉も出版されております。ハンス・リヒターが第七をロンドンで、ゲリッケ氏がボストンで演奏しました。輝かしい成功を収めました。まもなくサイドウル氏がニュー・ヨークで交響曲と〈テ・デウム〉を上演するでしょう。

第四交響曲と〈テ・デウム〉は一月二日に彼自身のコンサートで演奏されます。(ハンス・リヒターは) 同じくミュンヘンでも演奏します。

コペンハーゲンでは第七が演奏されます。

重ねて心から感謝しつつ、貴殿に感謝の義務を負っているAブルックナー」。先ず第一に謝意を述べたのはパウアーが率いるマンハイムのアカデミーコンサートの枠で上演された第七の演奏に対してである。ヴィルヘルム・ゲリッケは



ウィーン宮廷歌劇場指揮者を八〇年から八四年まで勤め、その後ポストンに移っていた。アントン・ザイドゥルはライプチヒで歌劇場楽長を務めた後ニュー・ヨークへ渡った。コペンハーゲンでの第七の演奏はこの手紙の予定通りには行かず、結局一九〇六年十一月になって初めて実現するが、ブルックナーの作品のこの都市へのお目見えとしては弦楽五重奏が九四年三月のこととなった。

七日付の〈ウィーン日曜月曜新聞〉にウィーンアカデミー合唱協会に於ける反ユダヤ主義的傾向とルドルフ・ヴァインヴルムの退陣についての記事が出る。ヴァインヴルムはブルックナーの友人でかつてオルガン曲を彼に捧げたこともある。またこの風変わりな名の新聞は元々日曜刊行紙として出発し、後に要望に応じて月曜版を加えてこの名を謳うこととなったが、さらに日曜版が無くなった後にも紙名は実際と矛盾しつつも存続した経緯がある。さてここに名の上がったヴァインヴルムはヴァルトファイアテルのシャイデルドルフの出で、ウィーン少年合唱団々員でもあったがさしあたり法学を収めた後に音楽に転じ、法曹合唱団に参加、ブルックナーとはその頃に出会って終生の友となるが、六五年にオーバーエスタライヒ及びザルツブルクの合唱祭で彼の〈ゲルマニア〉がブルックナーの〈ゲルマーンネンツーク〉をおさえて一等を得たこともあった。

十九日付でハンブルクの音楽家E・シュヴァイツァーからマルクセンの死を告げる来信。「尊敬する教授殿！

小生の父の友人、帝室音楽監督エドゥアルト・マルクセンの死を貴殿にお知らせしないわけには参りません。

安らかに穏やかに昨晩、長年の苦しい病（喘息と腎臓疾患と心臓肥大）から解放されました。死ぬことは考えておりませんでした。が突然に卒中に襲われて身罷った次第です」。ブラームスの師として知られる老大家が奇しくもブルックナーの天才を大いに認めていたことにはすでに以前にも触れたとおりである。

\* \* \*

クララ・シューマンの日記には、十一月「十三日ブラームスは今朝やって来た…十七日にはまたヴィースバーデンに二重協奏曲の上演に…十八日には皆揃ってここで練習。私はこの協奏曲を何度も聞いたから私なりに判断を下すことができる。私にはチェロとヴァイオリンを合わせてソロとするのはとても天来の妙想とは思われない…楽器も余り映えない…この協奏曲に将来があるとは思えない。作曲としては大いに興味深いし機知縦横ではあるが…ところが彼の他の曲の多くに見られるほどの新鮮にして人を熱くするような特徴がどこにもない。聴衆の反応は二つに分かれた…ヨアヒムとハウスマンが演奏したが、これ以上見事にはまず出来ないだろう…」

Chronologie. 1. Bd. S. 542f.

2. Bd. S. 371.

A. B. Briefe. 2. Bd. S. 27f.

C. Schumann. 3. Bd. S. 499f.



十二

十二月に入ってから先ずは「カルデロンの宗教劇」との記入がある。七日の水曜日にはリンツでブルックナーが手塩にかけた〈フロージン〉による彼のモテット《真夜中》が演奏された。またその翌日には「十二月八日リストのミサ曲を聴く、宮廷禮拜堂」との暦への記入。十日の土曜にはふたたび《真夜中》がリンツで同じ演奏団体によって上演されている。十一日にはこの年の二番目のアドヴェント（待降節主日）を迎え、第二回楽友協会定期コンサートでハンス・リヒターがモシユコフスキーとブルッフとヘンデルの作品を舞台に載せた。十四日にはもともとミュンヘンでレーヴィがブルックナーの第四交響曲を上演する予定になっていたが、アマールエ皇女が不在になることがわかり、作曲者自身のたつての希望で、翌年の三月に延期された。またこの日には音楽院をシュテファニー王女が訪問、盛大に迎えられたが、ブルックナーはどうやら歓迎陣のメンバーには加えられなかったらしい。

クリスマスには宮廷禮拜堂の聖務のためにザンクト・フローリアンに赴くことはなかったが、代わりにクロスターノイブルクの祝祭行事に参加した。聖歌隊の指揮者ヒルシュフェルトと首席司祭のハナウシユカからはしかしかなり冷淡に迎えられたというのは何故だろうか。

かくて前二年に比べると、第七への反響も徐々に静まり、春には第五をめぐる弟子との齟齬を来したこともあって、いささか曇りがちのこの一年も終わりを迎える。

\* \* \*

「週間新聞で読んだが、ライプチヒの新年コンサートで僕らの二重協奏曲が演奏されるそうだ。道々君からそんな話もあつたが——しかし今までまだ直に聞いては居なかつた。

日曜からは手紙を受け取ることが難しくなる。それで敢えて先に申し上げておくと、ライプチヒには喜んで行くつもりだが、報酬は要らないよ——旅費にかかる分は多少いただくことに敢えて異は唱えないがね。ついでにもう少しお伝えすると、日曜にはペストへ向かう(ホテル・ハンガリア)。二三日まで滞在のつもりだが、二四日にはしかしマイニンゲンに行き——そこからライプチヒに廻れば一番望ましいが。僕自身は「大丈夫」だ、しかし楽譜に関しては厄介かもしれない!

そういうわけだから結局こう願いたい。つまり、もし僕らがライプチヒで音楽に勤しむことになるなら、自分で(あるいは我らが第三者を介して、つまりおちびちゃん「チェリストのハウスマンのことを巫山戯てこう呼んだ」を介して、パーゼルのフォルクラントに、パート譜をライネツケ宛に送るよう頼んでくれたまえ。

加えてヘルツォーゲンベルク夫妻(ミュンヒェン、ヘス通三〇番地)に葉書を認めて、総譜を君のところ、もしくはエンゲルマンのところへ送るように頼んで欲しい。

何時何処でも君から、或いはライプチヒからお便りいただき次第、返事のもりだ。ペストにも一言便りを貰えるだろうか?

僕のせいで上演がふいになつたりしないように、あらゆる手立てを講じるつもりでいる、以上述べたところから、僕らの旅がどんなに愉しかったかお分かりいただけるだろう。また同様の旅を是非とも実現したいものだ。これはブラームスがヨアヒムに宛てて十二月十六日に認めた文面であるが、すぐその後十八日に今度はエリーザベト・ヘルツォーゲンベルクにこう書き送る。

「ごく手短に至急お願い致しますが、僕の総譜をマイニンゲンへ送っていただければ幸いです。今日中にペストへ発ち、それからマイニンゲンへ、さらに新年音楽会のためにライプチヒへ旅しなければなりません。すべて電報でしか連絡がつかず、そうでなければゆっくりとお手紙を認めたところですが。ご容赦いただければ幸いです。また当方のかくなる無礼にもかかわらず、貴女とハインツがいかがお過ごしか一言お知らせいただければと存じます。時折心慰められる噂を耳に致しましたが、それを裏書きしていただけることを望んでおります。ヨアヒムとの旅の途上、貴女方のことを懐かしく大いに話題に致しました次第ですが、フォルクラントその他からすでにお聞き及びのことかとお察し致します。新年過ぎればまもなく家路に就きたいものと願っています。多少なりともお便りいただければ幸甚にて、心から貴女の、J. B.」

Chronologie. I. Bd. S. 543f.

Goellerich. Bd. IV-2. S. 580f.

Brahms. bBriefe an Joachim. 2. Bd. S. 226.

引用文献

本文中の各章末尾に、以下の文献を括弧内の略号で示した。

- Bruckner, Anton: *Briefe 1852-1886* (= A. B. Briefe)  
Hellsberg, Clemens: *Demokratie der Könige. Die Geschichte der Wiener Philharmoniker*. Zürich-Wien-Manz 1992 (= Hellsberg)
- Scheder, Franz: *Anton Bruckner Chronologie. Tutzing 1996* (= Chronologie)
- Göllerich, August Auer, Max: *Anton Bruckner. Regensburg 1936 1974* (= Göllerich)
- Wessely, Othmar (Hrg.): *Bruckner-Studien*. Wien 1975 (= Bruckner-Studien)
- Anton Bruckner. *Dokumente & Studien*. Hrg. v. Grasberger, Franz. 2. Bd. Graz 1980 (= Dokumente)
- Decsey, Ernst: *Bruckner*. Berlin/Leipzig 1921 (= Decsey)
- Billroth, Otto Gottlieb: *Billroth und Brahms im Briefwechsel*. Berlin und Wien 1935 1991 (= Billroth)
- Brahms, Johannes. *Kalbeck*. Max. (Hrg.): *Johannes Brahms im Briefwechsel mit Heinrich und Elisabeth Herzogenberg*. Berlin 1908 (= Herzogenberg)
- Brahms, Johannes. Moser Andreas. (Hrg.): *Johannes Brahms im Briefwechsel mit Joseph Joahim*. Berlin 1908 (= Joachim)
- Litzmann, Berthold: *Clara Schumann. Ein Künstlerleben*. Dritter Band. Leipzig 1910 (= Clara Schumann)

(中なが・つねお 法学部教授)